

## 敗戦者にまで及んだ天皇による御厚情<sup>1</sup> — 大正時代のドイツ兵俘虜

ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス  
マホン・マーフィー  
(Mahon Murphy)

### はじめに

英日同盟軍日英同盟軍による青島の包囲は、大正時代に日本が関与した最初の主要な軍事行動であった。この作戦は約一週間にしかおよばなかったが、この軍事行動の結果ドイツ帝国が東アジアで敗北したことは、日本の帝命を奉じ、日本帝国の軍隊が中国へ進出するきっかけを作った。また、これは袁世凱大総統に不名誉な 21 項目の要求事項に同意する義務を負わせ東京で追加的な兵力を合併するきっかけとなった。これにより袁世凱大総統は屈辱的な対華二十一ヶ条要求を受け入れることを余儀なくされ、また日本がより強硬な政策に傾倒するきっかけとなった。青島の併合は、日本の外交官達には領土を拡張するための努力を集めるきっかけとなる一方、中国内で彼らの影響に対する緊張を高め、英日青島の併合は日本の外交官たちがさらに中国で影響力と領土を拡大しようと画策させるきっかけを作り、これは日英同盟軍の終局の始まりとなった。ドイツは戦争の末期には海外における全ての兵力を失い、日本帝国の存在に対し如何なる脅威ももたらしえないことは明白であった。青島で捕えられたおよそ 4,800 人の俘虜はただの政治的な背景に消えて行き、第一次世界大戦の忘れがちな軍人の中でやはり忘れられた出来事として、日本国に対しては何の興味ももたらさなかった。本稿では日本人が敵であったドイツ軍に対しなぜそれだけ寛大であったのかに対する理由と、その扱い方がどのように寛大であったのかについて議論したい。また、戦時から戦後にかけて、ドイツの俘虜達が日本に対して持っていた文化的な影響についても議論したい。

---

<sup>1</sup> *The Japan Times*, 10<sup>th</sup> November, 1914. “*The Emperor’s Grace Extends to the Conquered*”

日本はドイツにとって敵の国であったが、敗北後ドイツ人の日本に対する印象は、敵から友人に変わった。戦争が終わってから日本人のドイツ人に対するイメージは劇的に改善された。彼らドイツの俘虜達が日本の港に到着したとき、彼等は侮辱や投石ではなく、歓声と花で迎えられた<sup>2</sup>。人数と言う面では決して多くないドイツとオーストリア＝ハンガリー俘虜の小グループ達がこの国で受け与えた文化的影響は非常に特別であったが決して小さくはなかった。日本の銃後社会は直接的に過酷な戦争の戦いや過酷な影響を受けるかによって脅かされることはなかったため、敵に対する憎悪は、ヨーロッパのように民間では広がっていなかったのである。第一次世界大戦がもたらしたインフレの影響以外に日本人が戦争に関与したと感じさせるものは、ドイツ人俘虜の存在だけが、彼らが第一次世界大戦に関与したことを日本人に想起させただけだったのである。内容は違うが、Audoin-Rouzeau と Becker のコメントは日本のケースにも適用されるのであろう。そのコメントでは、収容所は戦争の新しく異なったマップを描くと主張している。戦場とは全く違う家庭にフロントライン（戦争の先頭）があるということである。オードワン・ルゾー（Audoin-Rouzeau）とベッカー（Becker）は、俘虜の収容所は彼等を受け入れた社会において交戦地帯とは全く異なる新たな戦場を作り出す、と述べている。この論説は日本のケースとはややニュアンスが異なるものの、それでも適用できる部分もあるだろう<sup>3</sup>。工学、音楽、料理などはもちろん、それよりもその他の一般的な行動を通し、ドイツとオーストリア＝ハンガリーの俘虜は、日本の大衆にその跡影響を残し、それが今現在も残っているのである。

#### 「ドイツビールを除けば、彼らに不自由はなかった。<sup>4</sup>」捕獲、治療、そして俘虜の態度

第一次世界大戦における日本の関与は、中国の山東半島、青島の港町中国、山東半島の港町である青島で始まった。山東でドイツ人の宣教師が殺害されたこと（巨野事件）に対し、ドイツ帝国はその報復として1897年、青島を奪った。この

---

<sup>2</sup> Schmidt, Hans-Jochim, Janson, Karl-Heinz, *Von Kutzhof nach China und Japan: Die Odyssee des Andreas Mailänder 1912 bis 1920* (Vereins Kollertal, Kutzhof, 2001) p.32.

<sup>3</sup> Audoin-Rouzeau, Stéphane, and Becker, Annette, *14-18 Understanding the Great War* (Hill and Wang, New York, 2002) p. 82.

<sup>4</sup> *The Japan Times*, 3<sup>rd</sup> February, 1915.

事件は、ドイツ海軍の作戦行動のため、太平洋の基盤を作る良い口実となった。山東半島は1897年、ドイツ人宣教師が殺害された件（巨野事件）の報復としてドイツ帝国が占領した土地であり、青島は後に彼等が租借地として環太平洋地方における海軍の拠点とした。町の支配権を手に入れた後、その支配者であるドイツ軍は土地を平らにし、下水道の設置から赤い屋根の家を建てるまで、現代ドイツ住宅の建設方式で完全に再開発したのだ<sup>5</sup>。そして青島港は、休養地としてヨーロッパでは高い評判を得、“東のブライトン”とも良く呼ばれた。この港町の開発は特に日本にとってはしゃくに障ることとなった。1895年の日清戦争後、ドイツがフランス・ロシアとの“トリプル介入”のリーダーとして直接介入し、日本の中国内の領土権主張を否定してきたからだ。日本が日露戦争で勝利を勝ち取り、1905年ポーツマス条約にサインしたことまで否定されると、東京でも暴動が起きた。青島がドイツによって開発されることは、ドイツが関与した三国干渉によって中国本土での足掛かりを失った日本人の心情を逆なでし、1905年のポーツマス条約でも割譲地を手にすることができないと日本の民衆が知った際には彼等は東京で暴動を起こしている<sup>6</sup>。

こうして2回も否定された後、もうこれ以上自分達の成功を否定されることはない、日本は1914年8月、第一次世界大戦に参戦した。自らの成功に対する報酬を2度も否定された日本は、このようなことがないようにと肝に銘じ参戦したのだ。英国も日本もドイツからの直接的な脅威にはさらされることはなかったが、英国は太平洋の航路を保護するため、日本に参戦することの勧誘を要請した。加藤高明外相は、この戦争に積極的に参加し、ドイツの植民地で「東洋の真珠」と呼ばれる青島を奪うことこそ中国で自分達の影響力を拡大するまたとない機会だと判断した。彼は自分独自の判断で日本を大きな紛争に追い込んだのである。ほぼ独断的に日本の参戦を決めたのである。伝えられるところによると、黄禍論の影響を受けたドイツ皇帝ヴィルヘルム2世（Kaiser Wilhelm II）は“黄色い

---

<sup>5</sup> Steinmertz, George, *The Devil's Handwriting: Pre-Coloniality and the German Colonial State in Qingdao, Samoa and South West Africa* (University of Chicago Press, Chicago, 2007) p. 434.

<sup>6</sup> Sims, Richard, *Japanese Political History Since the Meiji Restoration 1868-2000* (Hurst and Co. London, 2001) p.89.

危険"に対し、青島の統治者であるアルフレット・フォン・マイヤー・ヴァルデック (Alfred von Meyer-Waldeck) 総督に「青島を日本に奪われるのはベルリンをロシアに奪われるより恥である」と言うほど注意深かったが、駐屯軍には日本を防御できる程度の人数は揃っていなかった<sup>7</sup>。日英合同軍は日本の統率下、相手の人数を大きく上回った。ドイツ軍が降伏すると、日本軍は 4,800 人の俘虜を集め、監禁する収容所につれていくため彼らを日本につれてくる手配をした。ドイツ軍が青島から撤退させられたのは 1914 年 11 月 14 日、歴史的に奇遇にも彼らが 17 年前始めて到着したのと同じ日であった<sup>8</sup>。ドイツ人の俘虜は 1914 年 11 月から日本の収容所に入れられ、1921 年初頭に解放された。

太平洋から確保した少数の俘虜と一緒に、青島からの俘虜の多数は、日本の当局への行政課題を提示し、俘虜の初期治療を求めた。青島だけでなく、太平洋からも俘虜が連れてこられたため日本の当局は彼等への対応、そして初期治療という問題に苦しめられることになった<sup>9</sup>。日本への輸送のためのドイツとオーストリア＝ハンガリーの俘虜の収容所は、俘虜の一部は墓地で野宿するというもので厳しいものだった。その後、中国人の家を避難所として与えた。俘虜を輸送する環境は劣悪だった上に、彼等の一部は中国人の家が寄宿所として割り当てられるまで墓地で野宿することを強いられた<sup>10</sup>。しかし、日本は日露戦争時の俘虜の扱いでもそれ自体を実施していた。そしてドイツとオーストリアハンガリーの俘虜を収容するために使用される収容所のいくつかも同様に 1904 年から 1905 年に使用されていた。しかし、日本は日露戦争で俘虜を丁重に受け入れた経験があり、当時使用された収容所のいくつかは 1914 年にも使用された<sup>11</sup>。ロシアの将士将

---

<sup>7</sup> Nish, Ian, *Alliance in Decline A Study of Anglo-Japanese Relations 1908-1923* (Athlone Press UK, 1974) p.135

<sup>8</sup> 瀬戸武彦, 青島から来た兵士たち (同学社, 東京, 2006) p.30.

<sup>9</sup> Overmans, Rüdiger, *In der Hand des Feindes, Kriegsgefangenschaft von der Antike bis zum Zweiten Weltkrieg* Krebs, Gerhard, *Die etwas andere Kriegsgefangenschaft. Die Kämpfer von Tsingtau in Japanischer Lagern 1914-1920* (Böhlau Verlag, Köln, 1999) p. 324.

<sup>10</sup> Krüger, Karl, *Von Potsdam nach Tsingtau: Erinnerung an meine Jugendjahre in Uniform 1904-1920* (Books on Demand GmbH, Nonderstedt, 2001) p. 173.

<sup>11</sup> Checkland, Olive, *Humanitarianism and the Emperor's Japan 1877-1977* (St. Martin's Press, London, 1994)

兵は再び日本に対して武器を取らないとの約束に署名した後、仮釈放が認められた。仮釈放は、ドイツやオーストリア＝ハンガリー帝国将士将兵に提供されていない。しかし、彼らは、帯剣を許されて軍人としての体裁を保つことを許可され、しかもロシア人俘虜が受けなかった、給与と階級に応じた手当が与えられた<sup>12</sup>。

日本の戦争捕虜の扱いに関する現代の総意は、日本で俘虜が非常によく扱われたということだ。現在の研究では、日本は戦争俘虜を非常によく扱った、と言うことがコンセンサスとして受け入れられている。フランス戦争省は英国への書信で、日本にいるドイツ人は「一定の自由」を享受していると報告している<sup>13</sup>。横浜に拠点を置く外国メディアは、ドイツとオーストリア＝ハンガリーの俘虜と民間人に対する日本の寛大な処置に何度も注目している。この件が報道され始めた頃には、日本人の俘虜に対する「考える限りで最も騎士道的な親切さ」が取り上げられている<sup>14</sup>。しかし、戦争の俘虜に関連するジャパントイムズの記事には注目すべき辛辣があった。日本政府は可能な俘虜労働力を使用していなかったという事実を批判する記事は問題を提起した、「日本ではソーセージや道路を作りたいか？これに対してジャパントイムズが、「日本は道路じゃなくてソーセージが欲しいのか」と批判し、日本政府は可能な俘虜労働力を使用していないのではないかと問題提起したことは興味深い<sup>15</sup>。戦後の"快適な抑留の神話"戦争中に連合国の間で既に存在しており、英国と日本との緊張に寄与する因子であった。第一次世界大戦の後には連合国の間に、「快適な抑留」、つまり本来は敵であるはずの俘虜を味方は丁重に扱はずぎたのではないかと、という疑念が生まれており、これは後に日英緊張を生む一要因となっている<sup>16</sup>。

第一次世界大戦中には他のほとんどの国のキャンプ収容所と同様に、日本の収容所は中立国大使館や赤十字国際委員会から独立検査のための非定期的視察を許

---

<sup>12</sup> *The Japan Times*, 15<sup>th</sup> February, 1915 *German Prisoners do Themselves Well*.

<sup>13</sup> TNA 383/199 Germany Prisoner Files (151595-163489) 158087, French Ministry of War to the British War Trade Department 12<sup>th</sup> August, 1916.

<sup>14</sup> *The Japan Times*, 12<sup>th</sup> January, 1915.

<sup>15</sup> *The Japan Times*, 24<sup>th</sup> February, 1915, *Does Japan want sausages or roads?*

<sup>16</sup> Krebs, p.327.

可していた。これらの検査の記録は、キャンプからキャンプへの治療の格差を示している。彼等の報告によると、日本は俘虜の取り扱い方が収容所ごとに異なっていたようである。ヨーロッパの収容所システムと同様には、日本の収容所システムも一様ではなかった。俘虜の条件環境は、それらが割り当てられているキャンプ収容所に依存していた。最初に俘虜は即興キャンプ、主に寺の境内やレッドクロスの建物に収容された。俘虜はまず寺院の境内や赤十字の建物の中に作られた即席の収容所に集められた。興味深いことに収容所は全て大規模な人口密集地の近くに位置しており、これは大戦中に起こる文化的交流において重要な要素となる。例を挙げると、俘虜の内 314 人は浅草の寺院にまず収容され、そこから 30 キロ離れた習志野市に移動させられた<sup>17</sup>。東京の品川駅で電車到着時には、俘虜は多くの人に出迎えられ黄色または白色の菊を手渡された<sup>18</sup>。戦争は長くして、これはすべてのキャンプに適用されていないものの、より恒久的な軍事的な兵舎が、俘虜を収容するために建設された。戦争が長期化するにつれて、より長期的に滞在できる兵舎的なバラックを建設したが、全ての俘虜を収容することは出来なかった。

日本は、俘虜の扱いや手当などに関する規定を定めたハーグ陸戦条約を順守した<sup>19</sup>。そうすることで、日本が文明と培養国だと他の大国列強に対して証明することが重要であると思ったからである。ロシアの俘虜の治療と同様に日本は文明国としての地位を提示し、ドイツとオーストリア＝ハンガリー俘虜を優美な治療をした。日露戦争のときと同様、日本はドイツとオーストリア＝ハンガリーの俘虜を他の文明国がするように丁寧に取り扱った<sup>20</sup>。

しかし、抑留者の多くは、それ自体彼等が人道的に扱われていると感じていなかった。ヘザー・ジョーンズ (Heather Jones) が論じるように、人道的な扱いはどのようなものになるかの期待とその現実は、しばしばふたつは極めて異な

---

<sup>17</sup> 瀬戸, p.95.

<sup>18</sup> 瀬戸, p.95.

<sup>19</sup> Klein, Ulrike, *Deutsche Kriegsgefangene in japanische Gewahrsam 1914-1920, Ein Sonderfall* (Ulrike Klein Inaugural Dissertation zu Erlangung der Doktorwirke der Philosophischen Fakultaten der Albert Ludwigs Universität Freiburg) (Freiburg, 1993).

<sup>20</sup> 田村一郎, 板東俘虜収容所の全貌 (朔北社, 東京, 2010) p.29.

るものであった。自分達の扱われ方をどのように捉えるかは個々の俘虜によって違い、彼等の受け止め方は必ずしも現実を反映しているわけではなかった。<sup>21</sup> 収容所の検査官への将校によって行われた苦情は収容所に対する将校たちの不満が、これを反映している。松山収容所でのクレーマン (Kleeman) 少佐は、「日本で俘虜はよく取り扱われていると言う誤った認識を質したい」と発言した<sup>22</sup>。クレーマン少佐の苦情は、この主張を擁立していなかったとはいえクレーマン少佐の苦情は、現実に基づいているものとは言い難い。彼は、将校であっても他の俘虜と共同で生活しなければいけなかったことや、日本の看守が俘虜を将校の階級に応じて扱っていなかったというもので、サムナー・ウェルズ (Sumner Wells) もクレーマンの苦情を無視している。実際には、丸亀市の収容所の将校は苦情を言わなかった他の収容所と比べてもよく扱われており、与えられた自由も多かった<sup>23</sup>。

検査は一般的にキャンプがうまく実行され、受刑者がよく世話をされたことに留意すべきであるが、そのなかで例外があった。これらの中でも重要なのは、九州島に久留米市にある最古の収容所だった。基本的に日本の収容所は俘虜をよく扱っていたが、九州の久留米市にある収容所のような例外もあった。久留米二つの主要な問題は、場所の不足と警備員と俘虜の関係だった。久留米の収容所を検査したウェルズ(Welles)、フンツィカー(Hunziker)、そしてパラヴィチーニ (Paravicini)は全員が、老朽化によるスペースの不足と、俘虜に対する看守の扱いを問題視した。キャンプ収容所は、窮屈で運動の余地がほとんどなかった<sup>24</sup>。そして便所も兵舎に接近していたので"異臭"<sup>25</sup>を引き起こしていた。彼の3回の訪問の過程でフンツィカーは、収容所の司令官責任者が状況を改善することに失

---

<sup>21</sup> Jones, p. 92.

<sup>22</sup> Welles, Sumner, *Report on Prisoner of War Camps in Japan*, US Department of State Records 9763.72114/1491 (1916) p.30.

<sup>23</sup> Welles, p.14.

<sup>24</sup> Weiland, Hans and Kern, Leopold, (Eds) *In Feindeshand: Die Gefangenschaft im Weltkrieg in Einzeldarstellungen Band II*, Paravicini, Fritz, *Die Kriegsgefangenen in Japan* (Vienna, 1931).

<sup>25</sup> Welles, p.67.

敗したことを知って失望した。彼の最後の訪問で、彼はこのことに注意する際「この最悪の収容所では、すべてはかなりの程度同じままである。この劣悪な環境は最終的に少しも変わらなかった」<sup>26</sup>と発言している。久留米に限らず様々なところで両国間の関係を難しくした。ウェルズは、1915年11月にある収容所の責任者が大正天皇の即位を祝うためにドイツの将校にビールやリンゴなどを提供しながら、日独両国が戦争状態にあったためにドイツの将校が拒否し、結果収容所の責任者がこれを侮辱とみなして将校を殴打したことを記録している。司令官は後に自分のミスを認めた。司令官の防衛でウェルズは、彼がドイツ語を話さなかったことを指摘し、職員が日本語を話さなかったので、この種の誤解が発生しやすくなった。責任者は後に自分の非を認めたものの、言葉の違いもあってこの種の誤解が発生しやすくなっていたとウェルズは供述している<sup>27</sup>。

オーストリアハンガリー俘虜アルフレット・フォン・クーン (Alfred Freiherr von Kuhn) の回想録は、俘虜と人種的文脈の番兵の間に飼育下での相互作用を示す。オーストリア＝ハンガリーの俘虜として日本に収容されたアルフレット・フォン・クーン男爵は、自分達と日本人の関係を人種的な視点で観察した。彼は、日本人が男性よりも子供のような扱いをされたと感じた。彼らは自分自身を正常に動作する場合も、それらはよく扱われる。彼は、日本人が自分達を子供のように扱い、行儀よくふるまった俘虜だけをよく扱っていたと回想している。フォン・クーンは、「古拙な」日本のステレオタイプの考えを保持し、他を批判しているが、彼自身は「イエローペリル」と新渡戸の「武士道」に重点を置いて影響を受けた。フォン・クーンは自分達の国に未だに多く存在する「古拙な」日本人と言うステレオタイプを批判したが、それでも彼も黄禍論や「武士道」と言った概念に影響されていた。ドイツとオーストリアハンガリー人、特に将校は負傷せず降伏していたので、フォン・クーンはことさらに自分達が家畜のように扱われていると感じ、それが日本人に対する失望につながった<sup>28</sup>。彼が直接的に不満の声

---

<sup>26</sup> 井戸慶治, (翻訳), *Die Berichte des Pfarrers Hunziker über sein Lagerbesuche*, 青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究会第八号(東京, 2011) p.85.

<sup>27</sup> Welles, p.68.

<sup>28</sup> Weiland, Hans and Kern, Leopold, (Eds) *In Feindeshand: Die Gefangenschaft im Weltkrieg in Einzeldarstellungen Band II*, Von Kuhn, Adalbert,



を挙げたのは、脱走への処分があまりにも過酷だと抗議したときだけで、日本の美しい風景と生活しやすい環境、気候を気に入っていた。フォン・クーンによると、彼にとって日本の唯一の問題は、その土地が間違っただけの人種によって支配されていることだった<sup>29</sup>。

久留米と、一部将校の証言は、日本の収容所が確かに戦争捕虜の例外的な治療の神話に準拠していることを示唆している。久留米収容所の環境と一部将校の経験を除いては、日本は俘虜に対し、連合軍の同盟国が問題視するのも解るくらいの環境を提供した。戦後に世界中で流行したスペイン風邪の影響はあったものの、俘虜たちの健康状態は概ね「非常に良好」だった<sup>30</sup>。俘虜達はスポーツを楽しんだり、コンサートや展覧会を開催したりするだけでなく、農業や商業に従事する自由も与えられた。これらの活動を通じて、ドイツの俘虜達は日本の社会に足跡を残したのである。

### おはよう、Guten Morgen！<sup>31</sup>：俘虜が Kultur を導入

日本での収容所は Heimat（故郷）の縮図になったし、俘虜達は滞在した6年間の間に多くのドイツの文化を日本人に紹介した。俘虜達と一般日本人の最初の相互作用は、まず海港や鉄道駅で初めて日本人と出会い、彼らは日本人から丁寧な歓迎を受け、客人としてもてなされた。丸亀市の場合、俘虜達が収容所に到着時にすると、‘Herzlichst und mitleidvollst willkommen（心から親愛の意をこめて歓迎します）’<sup>32</sup>とドイツ語で書かれ、花で飾られた看板をもって迎えられた。以下では、日本での俘虜の文化的な影響を評価したドイツ人俘虜の日本における文化的な影響を検証する。

---

*Kriegsgefangen in Japan. Ernstes und Heiteres aus meiner „Furionenzeit“*(Vienna, 1931) p.80.

<sup>29</sup> Weiland, p.80.

<sup>30</sup> Welles, p.3.

<sup>31</sup> 横田新, 板東収容所長松江豊寿(歴史春秋出版, 若松, 2005) p.129.

<sup>32</sup> Barth, Johannes, *Als Deutscher Kaufmann in Fernost Bremen-Tsintau-Tokyo 1891-1981* (Erich Schmidt Verlag, Berlin, 1984) p.50.

ドイツ人俘虜達が日本に連れてこられた当初、彼等の多くは寺社の境内で過ごしたため、日本人は好奇心の赴くまま、彼等を一目見ようと収容所に群がった。ユニークなケースを挙げると、習志野市では俘虜達が酔っ払った学生達の歌声を収容所の壁越しに聞いていた<sup>33</sup>。また姫路市では数人の少女達が祭りの際に地元の神社に拘留されている「赤毛の悪魔」達をドアの隙間から見ようと忍びこみ、その結果彼女達は10日間外出禁止の罰を受けた<sup>34</sup>。やがて俘虜収容のシステムが整い、俘虜達が独自の社会とアイデンティティを確立し始めると、日本人とより恒久的な関係を築くための下地が出来上がった。

第一次世界大戦中にドイツのイギリス人俘虜収容所であるルーレベン(Ruhleben)で過ごしたマシュー・スティッベ(Matthew Stibbe)は、俘虜達は収容所の中で「想像上のコミュニティ(imagined community)を作り出した、と回想録に記している。Ruhlebenでの俘虜のためのキャンプ生活はすぐにすべての社会規範が含まれている、ミニチュアのイギリスの村に似せていた。スティッベは、イギリス人俘虜達は本国の村とほとんど変わらないコミュニティをルーレベン収容所の中に作り上げたと述べている<sup>35</sup>。例えば徳島県鳴門市にあった坂東収容所ではパン屋、肉屋など様々な店が立ち並び、これらの商業区域は中国におけるドイツ人租借地にちなんで「チンタオ」「タパタウ」と名付けられた。ドイツの国民のアイデンティティの表現は、キャンプのすべての側面で発見されることになって、音楽、講演会やキャンプの新聞を通じていた。サッカー、テニス、ファウストボール、体操など様々なスポーツクラブが作られ、音楽発表会や講演を行うことや新聞を発行することも許された。これにより、俘虜達はキャンプ内においてもドイツ人の国家アイデンティティを傷つけられることなく保つことができた。キャンプ内で流布したプロパガンダは二種類があり、一つは日本人の人道的な俘虜の取り扱い方、特に坂東収容所の責任者だった松江豊寿の寛大な処置を

---

<sup>33</sup> Krüger, Karl, *Von Potsdam nach Tsingtau: Erinnerung an meine Jugendjahre in Uniform 1904-1920* (Books on Demand GmbH, Norderstedt) p.181.

<sup>34</sup> Von Kuhn, p.77.

<sup>35</sup> Stibbe, Matthew, *British Civilian Internees in Germany (The Ruhleben Camp, 1914-18)* (Manchester University Press, Manchester, 2008), Anderson, Benedict, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (Verso, New York, 2006).

称えるもので、もう一つはドイツ文化の宣伝だった。Ruhlebenとは異なり、板東でのキャンプは、地元住民に積極的に影響を与えた。ルーレベンと異なる点は、板東収容所は地元住民に多大な影響を与えたということである。

日本当局は当初、俘虜達を収容所の中での作業に従事させ、<sup>36</sup>労働、「労役」は、積極的に俘虜によって求めて彼らは給料を受け取った給金も出たことから俘虜達も積極的に「ローエキ」に勤しんだ<sup>37</sup>。後に俘虜達は毎日数時間労役のために収容所の外に出ることを許され、多くの俘虜達が備えていた機械工学の技術を生かして給金を得た。俘虜の中には青島で港の工事に携わっていた者も多く、彼等は非常に熟練された技術を持つエンジニアだったため重宝され、例えば名古屋での俘虜達は排水工事を任されたほどだった<sup>38</sup>。青野ヶ原収容所の約170人の俘虜は、自ら志願して製鉄、染物、陶磁器製品の工場で働いてそれぞれの職場で重宝され、その労働に対して正当な賃金をもらった<sup>39</sup>。板東では俘虜は橋梁の一連の作業を開始した。板東収容所の俘虜達は抑留中の2年間で10本もの橋梁を建設した<sup>40</sup>。橋梁の建設は、共同の努力だった。日本の労働者が川岸を掘りながら、俘虜は、石を集めた。この事業は日本人と合同で行われ、日本の労働者が川岸を掘って土台を作りながら、ドイツの俘虜達は橋に使うための岩を集めた。このとき作られた石のうち二本はまだ現存しており、今なお日独友好関係の象徴と受け取られている<sup>41</sup>。

第一次世界大戦でその足跡を残した1914年のクリスマスに敵対する二つの陣営が塹壕の中でサッカーの試合をしたと言う記録が残っていることから解るように、第一次世界大戦中を戦った兵士達は厳しい戦いの合間にスポーツを楽しんだ。それは日本の収容所にも人気があった。ある日本の新聞が指摘したように、スポーツは、抑留の俘虜の時間の半分を取った。それは日本における収容所でも

---

<sup>36</sup> Welles, p.61, p.77.

<sup>37</sup> Paravicini, P.86.

<sup>38</sup> *The Japan Times*, 26<sup>th</sup> January, 1916.

<sup>39</sup> Paravicini, p.87.

<sup>40</sup> 田村, pp.85-86.

<sup>41</sup> 富田弘, 板東俘虜収容所 (法政大学出版局, 東京,2006) p.115.

同様に、俘虜達は一日の半分近くでスポーツを楽しんでいたということを当時の日本の新聞が報道している<sup>42</sup>。広島では地域の様々な高校生による混成チームと似島収容所の俘虜のチームが日本初の「国際試合」を行った<sup>43</sup>。また、坂東収容所で行われた体操の競技会には50名の日本人教師が観戦に訪れており、彼等はドイツ人が行った様々なスポーツに興味を示した<sup>44</sup>。キャンプでは、特に板東で俘虜たちは競技場を構築するために十分な余地があった、展示スペースとドイツの文化（Kultur）のための広告を作った。日本の収容所、特に板東では運動場を造るだけの十分な敷地があり、それは競技会の会場になっただけでなくドイツの文化を宣伝する場にもなった。日本人はドイツ人俘虜の身体能力だけでなく彼等の生活態度にも興味を示し、習志野市の収容所を視察した東京の2人の学校長は、ドイツ人俘虜の生活態度は子供達だけでなく日本の国民全体に対してもよい模範になると報告書につづっている<sup>45</sup>。

俘虜達もまた自らを文化の教師だと見るようになり、彼等の働きかけにより板東、似島、青野ヶ原の収容所で行われた工学技術、音楽、スポーツや食べ物の展示会は一般公開された。最も注目を集めたのは板東での展覧会であり、12日間で45,000人が訪れ<sup>46</sup>、日本人は絵画、工芸品や食べ物を通じてドイツ文化に触れる機会を得ることができた。特に食べ物のコーナーではほとんどの日本人がこれまで食べたことのないヨーロッパの野菜（トマトなど）や生ハム、そしてドイツビールなどを試食した。日本人はまるで外国のように様変わりした収容所の展示会を楽しんだ。この展示会は当時鳴門市の撫養に滞在していた東久邇宮稔彦王の耳にも入り、直接会場に向かうことはなかったものの展示品の一部が滞在先へと贈られた<sup>47</sup>。俘虜達は広島市庁舎（原爆ドームの周辺）で展示会を行った。

---

<sup>42</sup> Pörzgen, Hermann, *Theater ohne Frau das Bühnenleben der kriegsgefangenen Deutschen 1914-1920* (Ost-Europa Verlag, Königsberg, 1933) p.54.

<sup>43</sup> Seto, p.108.

<sup>44</sup> DIJ Bando Sammlung: *Austausch zwischen Deutschen und Japanern/ Sport*  
[http://bando.dijtokyo.org/?page=theme\\_detail.php&p\\_id=70](http://bando.dijtokyo.org/?page=theme_detail.php&p_id=70).

<sup>45</sup> *The Japan Times* 28<sup>th</sup> July, 1917.

<sup>46</sup> 田村, P.88.

<sup>47</sup> *Die Baracke: Sonderausstellung in Muya Band II no.7, April-September 1918.*

現在の広島市役所は、原爆ドームを通じて平和への願いを象徴していること有名だが、似島の俘虜の取り扱いを通じて人道主義も象徴しているのである。

板東の収容所内新聞であるディエ・バラック(Die Baracke)が「ベートーベンの第9交響曲ほどドイツ文化の真髄を示すものはない。それはバッハやモーツァルトに匹敵し、ヴァーグナーを凌ぐほどドイツ的だ」と述べているように、この曲ほどドイツ文化の伝道と言う目的に相応しいものは他になかった<sup>48</sup>。第9交響曲は1918年の6月にひと月に渡って公演され<sup>49</sup>、演奏したドイツ人俘虜だけでなくそれを聴いた日本人にとっても非常に印象深い出来事として記憶されており<sup>50</sup>、俘虜達が送還された後は徳島の人々は、これを記念して毎年大晦日に第9交響曲を演奏した。この伝統はやがて全国に広がり、現在では第9交響曲を演奏することは日本の大晦日の恒例行事となっている。この件は多くの研究者を惹きつけて止まず、今も日本における俘虜の取り扱いに関する歴史学的な研究という観点からでなく、日本の大衆文化研究と言う観点からも多くの研究が発表されている。

最後に、カール・ユーハイム(Karl Juheim)について記述したい。彼は最初に大阪に収容された後似島に移されたドイツ人俘虜だったが、釈放された後日本でバウムクーヘンを紹介し、この事業で大成功を収めた。ユーハイムのバウムクーヘンは、日本のバウムクーヘンの最も有名なブランド名の一つであり、多くの模倣者を生み出している。ユーハイムは、戦争前に青島にお菓子屋を実行してリリースされた後、日本での彼のビジネスをセットアップする。彼は最初に広島で開催された展覧会のために日本で彼のバームクーヘンを焼いていた。ユーハイムは開戦前に青島で喫茶店を経営しており、広島で開催された展示会でもバウムクーヘンを製造販売し、戦後本格的に商品を展開したところ大成功を収め、現在でもユーハイムの名前は日本でもっとも有名なバウムクーヘンのブランドとして認識さ

---

<sup>48</sup> *Die Baracke: Zu Beethovens 9.Symphonie, Schiller-Beethoven-Goethe.* Band II April-September 1918 no.10

<sup>49</sup> *Die Baracke: Lagerchronik für Juni* Band II, July 1918.

<sup>50</sup> *Die Baracke: Beethoven-Abend des Engel-Orchesters am 19. und 20. Oktober 1919 unter Leitung von Vz.Wachtm.d.L. Werner.* Band IV, October, 1919.

れている。彼は 1923 年の関東大震災後に横浜を離れて神戸に移った後もバウムクーヘンの販売を続け<sup>51</sup>、お土産の面では、ユーハイムは彼の採用された国にふさわしい貢献をした日本社会に貢献した。

## 結論

ドイツとオーストリア＝ハンガリーの俘虜に対する日本の対応は、第二次世界大戦後の日独国交正常化に少なからず影響した。板東での収容所は、この集団的記憶の焦点となり、現在は公正、人道的な扱いや国際協力の精神の同義語になった。板東収容所は、公正さ、人道主義、そして国際協調を象徴するものとして受け止められるようになり<sup>52</sup>、1972 年には、板東収容所の俘虜に展示のことを後世に伝えるために博物館が作られ、ドイツハウス鳴門と名付けられた。博物館は 1990 年代初期に、リュネブルクにある市庁舎の設計を真似た新しいデザインで再建された<sup>53</sup>。この西洋風の博物館は、典型的な田園風景と日本家屋の町並みの中に一軒だけ場違いなようにたたずんでおり、それはドイツの俘虜達が初めて日本に到着したときに恐らく感じたであろう不自然さを象徴している。ドイツ日本研究所はまた、一次資料の非常に有用なオンラインアーカイブを提供するそれらのライブラリで特別なコレクション、板東通信コレクションをオープンした。また、ドイツ日本研究所は板東通信コレクションを開設し、一次資料をインターネット上で公開している。そして 2005 年には日本のドイツ人俘虜と地元の住民との交流について描いた映画「バルトの楽園」が公開され、撮影のために作られた収容所のセットは現在松江市でテーマパークとなっている。漫画的なマスコットキャラクターも考案されており、研究施設としての側面が強いドイツハウスとはまた違う視点からこの件の普及に一役買っている。

第一次世界大戦中に日本の戦争の俘虜治療は、第二次世界大戦までの日本における過激主義の発展とは異なる物語に属する。第一次世界大戦中の日本の俘虜に対する対応は、第二次世界大戦前後のそれとは対照的である。第一次世界大戦中に日本の当局による戦争俘虜の扱いは、1930 年代のように過激ではなく、日本の当局の対応はまだ大正デモクラシーの時期の理念を反映しており、ドイツとオー

---

<sup>51</sup> 瀬戸, p.124 .

<sup>52</sup> Krebs, p.231.

<sup>53</sup> 瀬戸, p.6.

ストリア＝ハンガリーの俘虜達はヨーロッパで同胞達が受けたよりもはるかに人道的な生活環境を与えられた。戦後、国際政治を取り巻く環境が変わり、日本もドイツやオーストリアより他に優先すべき外交課題が噴出したため、この件は政治外交の表舞台から忘れ去られた。しかし、俘虜達が日本の社会に与えた影響はかなり大きかった。日本人は俘虜達に好奇の目を向け、そして俘虜達も工事、音楽、食べ物と言った面で日本の社会に足跡を残した。パラヴィチーニの報告書は、俘虜が彼らの祖国で忘れ去られていたと感じたことを指摘した。パラヴィチーニは、俘虜達はその祖国ですっかり存在を忘れられていた、と報告しているが<sup>54</sup>、しかし、彼らは彼らの捕獲者の土地で愛情を込めて記憶されている。彼等を捕えた人々は彼等を今も忘れていないのである。

---

<sup>54</sup> Paravicini, p.84.